



ゆめめも

treewhite

ボロボロの男

その男はボロボロだった。

手はもげ、腰から下はあったかどうか分からない。

悲惨なことになっている身体よりも、半分腐って崩れ落ちそうな色の顔に、私は見入ってしまっていた。

男の何も無い右の眼窩と、左の強い意志のこもった黒い瞳は、私の視線とぶつかったまま動かない。

沈黙が流れた。男は喋れる状態なのかも知れないが、叫び声であれ泣き声であれ発せるはずの私は、ただ茫然と男を見つめていた。

不意に、黒いトレンチコートを羽織った青年が私の横を走り抜け、死に際の男に駆け寄った。

青年は殆ど胴体だけの男を抱えあげた。男に辛うじて付いていたような左手の皮膚の細胞がその衝撃に耐えきれず、ぶつりと途切れる。

青年は男の頭と胴体にしか用が無いようで、今千切れたばかりの左手や他の四肢には見向きもせず、暗いその行き止まりに背を向け、走って行った。

私も、その後を追いかけた。

腐りかけの男について、私は何も知らない。

ただ、彼自身の思想に全てを——そう、自分の人生も、感情も、命も、その全てをかけて報いた、そういう人物だったことだけが、私の持つ彼についての知識だった。

青年は洗面所に男を運び、その台に乗せた。

男の頭までは入らなかったが、その胴体は真っ白な洗面台にすっぽりと納まる大きさだった。男の口が、何やら小さく動いている。

青年は呼吸すらも押し殺して、その微かな男の息と言葉を静寂から拾おうと必死なようだった。その遺言を邪魔しないように、私はそっと、その様子を物陰から伺っていた。

やがて、青年はうなだれた。

男は事切れた。

私は、何も言えなかった。

どうすればいいのかもわからず、私は自室に一人、椅子に座っていた。

引き戸を見つめていると、突然、それはすっと音もなく開いた。

黒いトレンチコートの青年だった。

小脇に、何か四角い箱を抱えている。

淡い桃色の箱に、何故か何も書いていない熨斗紙が貼ってあった。

青年は、無言のまま、私に開けてみろと促すようにその箱を差し出した。

私は無言で返し、蓋を開けた。

その瞬間、確かに私の部屋は静寂で満たされていた。

けれど私は、その中身に、心臓が一回、大きく跳ねた音を聞いた。

さっき死んだばかりの男が、薄桃色の箱の中で眠っていた。

右の開いた眼窩はそのままで、左の意志の強い目は、もう瞼の裏に隠れてみることは出来なかった。

すぐに蓋を閉じる。青年は相変わらず黙ったままだった。

いや、私の耳が青年の声を聞きとらなかっただけかもしれない。

とにかく、わかったことは、青年が私にこの箱を、……男の亡骸を、託したがつていることだけだった。

青年は無言を貫きとおして、私の部屋を去って行った。

薄桃色の、プレゼントとは言い難い土産を残して。

私は薄桃色の箱を、どうすることもできなかった。

掻き抱くようにして持っていた薄桃色の箱が、青年が去ると、急に恐ろしくなった。

そっと水平に戻して、机の上に置く。少し距離を置いた場所に椅子を転がして、私はその上に完全に乗ってしまって、膝を抱えて丸くなった。

薄桃色の箱を、見たくなかった。

青年が去ってから閉じていた引き戸が、再び開く。

そこに居たのは両親だった。

母が、薄桃色の箱に目を留める。

それは何？ そう、尋ねられた。

拒む言葉は吐くだけ無駄だと思った。なぜそう思ったのかは分からない。

そもそも、なぜ私はこの箱の中身の男を知っているのか、分からない。

彼が死んだ理由も、彼がその身を壊してまで貫き通した物も、分からない。

泣きたくなった。

両親が箱を開ける。

腐りかけた男は、二人の眼にどう映ったのだろうか。

そしてその薄桃色の箱を持っていた娘を、どう思ったのだろうか。

私はそれが、何よりも恐ろしかった。

雪の積もった洋風の街。
しかし雰囲気はさながら中国の繁華街のようであった。
私は一人、ロシアを旅しているようだった。

手元には充電残り数%を示したiPhone。
荷物の中には充電器があるものの、肝心の充電元である乾電池の中身が空だった。
エネループが欲しい。そう考え、色んなお店を歩きまわった。
ただの乾電池ではもったいない、エネループが良いのだ。
その時の私の考えは凝り固まっていた。

何件か充電式の電池類を売っている店を見つけたが、売っているのはどれも粗悪品のコピー商品だった。

しかめ面を隠さず売り場を手持ち部沙汰にうろついていると、地元民らしき男の子がひょっこり顔をのぞかせた。

彼が何を言ったのかは覚えていないが、彼にとって異国民である私の様相が面白かったらしく、やたらからかうような言葉と仕草を見せてきた。

そしてどこの店も、必ず店主はあわよくば粗悪品を買わせようとセールストークを語りかけてくる。

背中がむずがゆいような居心地の悪さを覚え、私は慌てて店を後にした。

雪の降る寒い町を、あてどなく歩く。

その路地の上で、偶然にも友人とばったり出会った。

心細い異国の地での再会に嬉しくなり、思わず話が弾む。

しかし、ふと、その友人は私と入れ違いにロシアへくる予定だったことを思い出した。

すなわち、それは私が日本へ帰らなくてはならない時間がかなり近いということを示していた。

帰国時間を悟った私は慌ててバスを探し、友人に道を教えてもらって、なんとかぎりぎりに乗車することができた。

バスの中から、ロシアにもう暫く滞在する友人達にしばしの別れを告げ、私は極寒の地を後にした。

吸血鬼のいる学校

真夜中、私は誰かに追われていた。
よりもよって深夜の学校で。

息も絶え絶えに駆け込んだのは、最近よく行事準備で使用している特別教室の中だった。
ここなら鍵も掛けられるし、隠れてあれをやり過ごせるかもしれない。
ほっとして扉に背を向けた……その瞬間、地につけていた両足が凄まじい力で払われて、私は光沢のある白いナイロンの床に叩きつけられた。うつ伏せになってしまい、顔の皮膚と床がこすれて引き攣る感触を強烈に感じた。
どうやってこの部屋に入ってきたのかはさっぱり分からなかったが、そいつは私の背中を思い切り踏みつけていて、息が出来ず動けなかった。そいつが酷く嬉しそうに笑っているのが気配で分かった。
私はふと、この学校には吸血鬼の伝説があることを思い出して、ああこいつはその吸血鬼だったんだ、と考えた。
夜には化け物が構内を徘徊している。彼らに理性はあるが、理解して自ら人を襲っている。昼間のうちに噂を流して、間に受けて寄ってきた阿呆な人間を餌にする。
そういった伝説だった。私は見事にそのとおりにされた阿呆な人間であった。

何故だか分からないが、どこからか小さくメロディが聞こえてきた。
mp3プレイヤーがイヤホンから音漏れさせているような、その程度の音量の音楽。
よくよく聞くと、私はその音楽を知っていた。その時よく見ていた某アニメのchampionという曲だった。
私を踏みつけている吸血鬼にも、音楽が聴こえているのだろうか。
吸血鬼にとっては別かもしれないが、私にとっては、状況に酷く不釣り合いな、明るい曲だった。

サビの意味は確か、今度は私が勝つ番だ、とか言っていた気がする。
そう思った時、私にピンと閃くものがあつた。
ああ、この曲はこの吸血鬼の為のものか。

スリーカウントして引き倒し、あなたを木っ端みじんにしてしまおう。
これはチャンピオンになるための私のチャンス。

引き倒されているのは私であり、木っ端みじんにされかねないのも私であった。
そしてこの状況における勝利者は、私でなく、間違いなく吸血鬼のほうであった。

ふと気がつくと、吸血鬼は居なくなっており、私は独りきりでナイロンの床の冷たさを感じていた。
周囲がうすぼんやりと青く、静かで気持ちの良い空気の匂いがした。
しかし私は気がついた。もう私の身体は奴らの仲間になってしまっており、太陽の下に出るのは叶わないのだと、本能的にその事実を感じた。身震いを一つすると、足が勝手に走り出していた。

底冷えのする空気を吸いながら走って階段を上る。冷たい風の吹く季節だった。
屋上に駆け上がると、遠く見渡す山々の向こうに日が射すのが見えた。
夜明け。
今の私にとっては恐るべき夜明けだった。
背筋が凍ったが、同時にそれは救いにも見えた。
酷く恐ろしく、酷く美しい日の出だった。

駆け出すと身体が軽く、以前に比べるまでもない体力を得たらしいことが分かった。
そのまま屋上の縁まで加速し、足が命じるままに跳躍した。
目の前に綺麗な夜明けの空が一杯に広がり、上へと流れて行く。

下へと落下した私の身体は、そのままグラウンドに軽々と着地した。
間髪入れずに走り出す間にも、太陽はじりじりと顔を見せはじめる。

ああ、間に合わない——どこか清々しい思いで太陽を見つめながら、私は木々の茂る日陰を力の限り目指した。

吸血鬼の私が、清らかな日光から身を守れたのか、それとも間に合わずに木っ端微塵になったのかは、とうとう分からないままだった。

老婆の話

一人の老婆がうなされている。

老婆は夢を見ていた。

夢の中で老婆は若返り、小さな少女になっていた。浅黒い肌に、ウェーブの掛かった黒髪を持った少女は大勢の人が詰め込まれた貨物コンテナのなかに、一緒になって揺られていた。みんな薄汚い格好。まるで奴隷の輸送貨物のようなだった。人々がふと、ざわめき始める。少女は何故か立ち上がって、一緒にコンテナに揺られていた大きなドラム缶の裏には知って消えていった。老婆は幼い頃の自分を、よろけた足取りで必死に追った。

気づくと少女は若い女になっていた。そこは昔住んでいたリビングで、家族が暮らしている。

しかし悲劇が起こった。誰がどのようにしていたかは覚えていない。超常現象だったかもしれない。しかし、夫や両親らしきものが悉くうつ伏せに倒れ、致死量と目で見えてわかる血を流していた。リビングは何故か床面が水浸しで、血はその表面をたゆたっていた。血が意思を持った蛇のように水面を履い、女の前に文字を作る。

I xxx you

you dead forever ..?

よく覚えていない。しかしおぞましい呪詛のような意味合いの英文が綴られていた。

老婆は茫然自失の若い自分を何故か他の位置からじっと見つめていた。

若い女は部屋をそっと去る。そして老婆も。

ドアを開けた向こうにあったのは、白い壁面にパソコンとモニターが沢山おかれている研究所のような場所だった。

老婆はそこでたくさんの線につながれて夢をモニターされていたようだ。ここから、夢を見ていた私が老婆そのものだったのか、私が私そのものだったのかは、分からない。

研究所のその部屋の左壁面には、一台のパソコンとそれにつながれた大量のモニターが、何やらシミュレーションを行っていた。所長らしき女が簡単に、それで先程の夢を再現しているのだと補足してくれた。所長は長い黒髪をきつく後ろでまとめ、オールバックの髪型と鋭い視線がなかなか冷たく厳しい研究者然とした雰囲気を出していた。私は興味深くモニターを覗いた。蛍光色の緑の線がモニター上を走り、なにやら立体映像を描き出した。これは、部屋だろうか？ 立体映像にリアルな色がついて行くと、そこが何か分かった。少女の姿の老婆が居たコンテナの中だ。コンテナの中にはたくさんの人々がいるが、少女はいない。少女が去った後らしい。

突然、画面の中でコンテナの奥の壁が割れ、いとも容易く破かれて白く大きな化物が侵入してきた。ロボットのようだ。機械音と赤く光るガラスの目。それはアームを伸ばして人々を蹂躪し始めた。運搬されていた奴隷に対抗する術は無く、叫び声をあげながら殺されていく。腹を貫かれ、頭を潰され、腸を引きずり出され、ものの数秒でモニター上のコンテナの中は血だらけになった。これが少女の出ていった後の世界だったのか。思えば老婆の家族を殺したのは、白いロボットのもう少し発展したやつだったのかもしれない。

覚えてない。

モニターを見ているうちに、おかしい異変があった。ただの画面内で収まっていたはずの殺戮兵器が、こちら側に手を伸ばそうとしていた。よくよく考えると、それは再現機だった。ロボットは実際にデータから復元されようとしていた。白い体は何時の間にか黒く染まり、黄色くより生き物じみて見えるロボットの眼球がぎょろりと回ってこちらを見据え、恐ろしい咆哮をあげた。再現機はレンジぐらいの大きさで、顔の再現だけで許容量を超えたロボットは、空間を求めて這い出ようとしていた。私はたまらず逃げ出した。所長も一緒になって外へ出た。

逃げ出した外は駅のプラットフォームだった。プラットフォームの中に研究所があるようだ。

あの装置はちゃんと緊急事態に備えて停止する機能があるのか、と所長に聞いた。

ええ、再現物が暴れたら本体が壊れるはずよ、と彼女は答えた。

確かに、あの装置はたった一台で制御しているなかなか優れもので、その本体は化物のすぐそばに置いてあったことを思い出した。研究所の方向から悲鳴が聞こえる。ふいに電車の発車合図が鳴った。黄色線の近くにいた私たちは慌てて下がった。発車する電車。しかし、何故か様子がおかしい。ぎこちなく私達の前まで進行したあと、錆び付いたうるさい音をたて、電車が止まった。レールか車輪がおかしいらしい。

嫌な予感がした。

この電車にはベッドが載せられていて、先程の老婆が寝ているはずだった。老婆が逃げるのを引き止めるかのような停車だった。なにか物騒なものが研究所から出て来たような気がしてならない。研究所を見ると、もう悲鳴は聞こえてこなかった。駅の中全てがしんと静まり返っていて、これから始まる恐ろしい出来事の前触れを感じ取って――

跳び起きた。

その続きを知りたくて眠りを求めたけれど、一向に老婆と所長の結末は分らずじまいだった

。